第９回「平成 28 年熊本地震記憶の継承」検討・推進委員会　議事要旨

日時：令和５年（２０２３年）７月２６日（水）１０：００～１１：３０
場所：益城町役場　２－４、２－５、２－６会議室
出席：柿本委員長、星野委員、竹内委員、田中委員、西山委員、加藤委員、土屋委員、高橋委員、西川委員、新宅委員、西田委員、松野委員、吉村委員、水嶋委員

１．開会

- 委員長挨拶
- 事務局
  - 議事公開について説明
  - 配布資料の確認

2．各専門部会における活動報告および今後の取組予定

- 事務局
  - 震災遺構の保存・活用専門部会の活動について説明
- 専門部会長補足
- 事務局
  - 防災教育専門部会の活動について説明
- 専門部会長補足
- 事務局
  - 震災記念公園専門部会の活動について説明
- 専門部会長補足

3．意見交換（〇：委員　◆：事務局）

〇：ある団体から、益城町の防災について研修の相談があっている。いろいろなアーカイブ、どういう順番で見せたら一番効果があるか。県の震災ミュージアムは回廊型で、ぐるっと回って一つの教訓にする構想。益城町がどこかに紹介するときに、こういう順番でこういうストーリーで見ていただくといいという資料があれば助かる。もう一つ、その団体は南海トラフを非常に心配されている。地震が起こったときに、どう動けばいいか、その教訓があればと伺っている。記憶の継承を活用して、今後どう対策していくかという所まではまだいってない。でも、そこを聞きたいということがあるので、そこに力を入れていけば。

- 〇：現地に行ってほしいとか、そういう気持ちはすごく持っている。モデルコースとか、例えば車で行くのか、自転車で行くと楽しいとか、そういう楽しみも含めた勉強コースとハイキングコースと。そのようなものを議論して皆さんの意見を聞きたい。
- 〇：いくつかモデルコースが設置できるといい。ただ現状、何か主力的なものがあるわけではない。地域おこし協力隊、語り部、いろいろと案内を経験している方に提案いただけると、今までの蓄積の中から、モデルコースに近いものが共有できるのではないか。昼食の問題とか、見る以外のことも課題として出てくる。活用のところではコンシェルジュのような、要望に応じたコースの提供をコーディネートできる人の育成というのも重要だが、現状そういう役割の方が育成されていない中で、語り部や地域おこし協力隊の人たちがそれに準じたことを担っていただいているのではないか。
- 〇：活用の部分で、「みんなでツナグ益城の記憶」というイベントを開催し、それぞれの記憶や体験を次の備えに繋げるきっかけ作りをしている。県外で話すと、町民自らが自分たちの記憶の継承を話すってすごいと褒められるが、益

城では知らないと言われる。なので、そういったことを知らしめていくということもやっていかなければならない。

- ○：アーカイブ集を整備して、その中でポイントを選びながらモデルコースを整備していくといい。半日コースとか 1 日コースとか、地域ごと。そういうガイドマップの整理を。そういうものがないと外から来たときの対応が難しくて、それを語り部にうまくやってくれという形は厳しい。それと、地震の対応も住民の人がどうだった、行政がどうだったという、初動としてどういうふうにしたのか、その辺をわかりやすい形で発信できるものにしてください。

○：にじいろ、記念公園、庁舎の 4 階。がっかりした部分がたくさんある。できてしまったものは仕方ないが、これをどういう形で使用し、何を教訓として発信するのか、ということが明確になってない。テラスの案内板に布田川断層がこう走っているという目印を入れれば、見え方が違う。ＫＩＯＫＵができ、益城にどう人が流れてくるのかわからない。ＫＩＯＫＵとの連携をとりながら、こういうことをＫＩＯＫＵで見てきたけど、益城ではどうかという流れを作らないと、あそこで終わってしまう。その辺も踏まえた上で県に話をすることが必要。それと防災教育の部分に関して、修学旅行に来るときに、現場の子どもたちの話を聞きたい、ということもある。だから、そこをカリキュラムの中に入れてほしい。それと、総合教育の中で、県内の小・中学校の子どもたちも、現場に来てほしい。修学旅行は県外から来るけれど、県内の子どもたちは総合学習の中で触れてほしい。その誘致もお願いしたい。外部からかなり問い合わせも来ている。そういったときに、にじいろを見せて、記念公園を見せて、役場を見せて、何を説明するのかという部分が心配しているところ。今は震災の時の体験談とかを語るという形をとっているが、せっかく施設ができたので、有効に活用していきたい。

- ○：先ほどと同じくストーリー性をどう作っていくかという話。あまり災害ばかりで作らず、益城の良いところも一緒にアピールできるような形のストーリーを。来られた方に、益城の良さが伝わる、そういう形でストーリーを整備してください。
- ○：100 点満点のものができたという形ではないが、震災というところを強く、どこまで出すかが難しかった。例えば一番象徴的なのは記念公園のモニュメント。命の記憶、犠牲になられた方々を思い出させるということが大事だった一方で、あまり直接的に表現するというのはいかがなものかというところもあって、やや抽象的にというか、控えめになった。ストーリーとか、語り部がしっかり活躍してくれる仕組みを作る中で、より深く、印象強く地震のことが伝わってくるような仕組み、環境というものをこれから作っていかないといけない。
- ○：益城の良いところを含めて、というところが重要。日常と非日常をどう繋げていくのか、生活を守るための防災であるということを伝えるためには、日常としての生活をしっかりと理解して、それがどう変わったのか、災害によってどういう影響を受けたのか、そして日常をどう取り戻すのかという大きな流れを大切にしながら、ストーリーが作れるといい。学びに来る方は、まず自助ということで自分たちの備えが重要だと思うが、益城町でも多くの方が支えあいで課題を解決してきたし、外からの支援というのは重要な点でもあるので、共助であったり、支援の部分、公助のあり方、見直しがされたところというのを表のような形で一つまとめていくと、ストーリーも組みやすい。
- ○：形のあるものはどうしても強く出てしまう。目に見えてしまうと、強いメッセージ性を持つので、直接人が伝えられるような、対話の場所を作っていきたい。保存と活用も、保存しなければいけないのか、活用していっていいのか悩ましいが、どちらも大事。7 年間記憶の継承をやってきたが、持続可能な形になるためには、これからも関わっていく人が増えていかないといけない。そんな中で子どもたちが学ぶというのは大きい。町外の熊本県下の子どもたちと交流したり、身近なところの歴史を学ぶということでやっていけたら。

○：いろいろなハード整備がだんだん進んできている。今後どうやって活用していくか、各部会の活動内容は活用の方に移っていくが、3 部会それぞれまだバラバラで動くのか？どのように今後活動していくのか。

- ○：活用は、連携が大事。遺構をどうする、遺構をどう生かす、教育にどう繋げていく、日常的にどう使っていくか。

合同部会というか、三つの立場が連携しながらやっていくことが必要。実際去年月 1 回議論していて、実質そういう活動になっているので、専門部会は、とりあえずは必要ないと感じている。ただ、要綱には規定があるので、そこの関係をどうするかは課題。できれば合同部会というか、連携した議論の中でいろいろな意見をいただきたい。

- ○：ストーリーを考えることだったり、これからの施設の活用の部分を議論していくという中では部会がそれぞれというより、連携して議論していくことが重要。いただいた宿題を解決する、作っていくためにも連携した形で進めていけたら。ただ記憶の継承は長期的に終わりのない活動で、またそれぞれの部会で議論する必要が出てくることも考えられるので、部会という形というか、組織としては残しておきながら、強い連携のもと活動の議論ができれば。
- ○：これまで月 1 回のミーティングをしていて、非常に機能している。終わりのない活動を行政がやっていけるのは、基本方針の要綱があるから。この委員会はすごく大事なので、公民連携の場だということで、これまでもそれぞれの地区の代表の皆さんに教えてもらいながらやってこれた。行政は、それぞれの部局でやることが決まっていて、教育委員会は教育委員会、財政は財政というふうに。それは今後も残していった方が明確になると思うので、合同部会という形で活動していければ一番いい。併せて、宿題をいただきましたが、お金がないと、何事も回っていかない。予算をつけたりとか、人がどれだけ割けるか、こういう検証のようなものに専任の人は充てられないと思うが、その辺の予算化であるとか、そういったことをお願いしたい。
- ○：冊子作るくらいだったら、こちらからでもサポートも。各部会を超えてワーキングで今後活動されていくという話だが、議論の途中、地域おこし協力隊との連携等の話もあったので、その辺と連携していきながら、にじいろがあって、公園があって、展示があって、これまだバラバラなので、いかにうまく連結するか。彼らの活動も、にじいろを中心としてやっているので、どういうふうにうまく活用していけばいいかということを、一緒になって議論をしていけば。今後はワーキングの形で、先ほどの宿題にまず、対応を。それとまだ整備途上のものがあるので、それはそれぞれの部会の方で。

○：阪神淡路大震災の 1 週間後に、現場に行った。ビルが横倒しになり、道路が割れている。視覚で見ると、ひどかったんだなとわかる。どんなにひどかったと聞いてもどのくらいかわからなかった。震災で自宅にいて、これを阪神淡路大震災のときの人たちは言いたかったんだというのが、体感してわかった。でも言葉ではなかなかわからないし、近くで見て被害の状況を見てもわからない。これが本当に熊本震災の振動だなというのが体感できるようなものは、何かできないものか？

- ○）起震車という体験ができる車両があるけれども、常時置くのは大変。
- ○）熊本地震のときどれぐらい揺れたかの軌跡はミナテラスに展示がある。起震車は、熊本市消防に依頼をすると、イベント的にだが来てもらえる。コンパクトなものとしては、一企業がやっているものとして、地震ザブトンというのがある。
- ○）すごくそうだなと思えた。言葉では伝わらないかもしれないが、それを神戸に行ったときに言うと、わかってくれてありがとうと言われると思う。そういう対話の場っていうのが、この記憶の継承でやっていかなければいけないこと。語り部がやっていることも、まさにそういうことだと思う。

○：熊本地震のときに熊本県の観光連盟におり、教育旅行受け入れ促進協議会の事務局長だった。熊本県では年間 13 万人ほど県外からの修学旅行があったが、熊本地震以降、ほとんど壊滅状態。1 万人とか 2 万人とかまで減った。どうしたら教育旅行が復活できるかと考えて、現地を見てもらうことが一番だろうというふうに思い、旅行会社とか、熊本県の方と連携して、県外からの旅行エージェント、それから学校といったところに視察に来てもらい、現地を見てもらうという招聘事業をやった。やっと今年ぐらいから、11 万人、12 万人ぐらいまで復活したというところで、アドバイスするとしたら、教育旅行のプログラムとして、県外の方への PR、招聘事業をやるべき。せっかくいいものができても、お客様がいないと継続もできないので、県外への PR 活動を強化していけば。

〇：ハードをどう利用していくかという話で、地域の住民の方、子どもたちが遊んでいるとか、地域のおじいちゃんおばあちゃんが寄って話すことができる、消防団は毎週点検作業行っているので、その辺の利用ができるようにする。火災のときにホースを使えば、消防団はホースを洗って、干さないといけない。そういうことができる場所が、益城町で 1 ヶ所でもあれば。普段ハードを利用しないといけないということを言われているが、具体的なことが挙がってきていないので。防災の研修で学びに行くが、いつも語り部やそこの職員が、施設を利用して、状況を説明するだけ。でも地域の消防団が、例えばホースを洗っていて、その人たちと話ができたり、おじいちゃんおばあちゃんと話ができたりすれば全然違う。特に杉堂地区には何回も行っているが誰一人いない。何のために税金使ってやっているんだというのが率直な意見。地域の方に掃除を依頼して、少しずつその辺の方たちが寄ってきたり、そういう利用の仕方があってもいい。

〇：四賢婦人記念館の案内人をしている。地震のことでの問い合わせ、まず役場に来ると思う。役場に行った場合に、どうしたらいいのか。代表は決まっているのか。

- ◆：内容にもよりますけれども、視察の受け入れについては、危機管理課の方でやっておりまして、断層本体そういう学術的な内容については生涯学習課の方で担当しています。
- 〇：益城町役場は問い合わせをするときにどこに行けばいいかわからないというのが多い。観光は特にそう。観光課というのがないので、尋ねた。はっきりしてればいい。
- 〇：要は、窓口がわかっている人は苦労しない。どこに相談したらいいかわからないというのが一番困る。そこを救えるようなこの委員会でありたい。ワンストップにはならなくても、防災と観光と地域づくりは、一見バラバラに見えるけど、記憶の継承ではそこを一緒にやるというのが大事。
- ◆：布田川断層帯の断層周辺の案内板とかの整備についても、観光と連携しながら、看板設置場所、サインの設置場所を考えています。地元でどう使ってもらうか、地域にまず使われてこその活用になると思うので、その辺も、地域の方に清掃してもらう、見守ってもらうということで、活動の方は進めています。

〇：先ほどストーリーというお願いをしたが、秋津川は GPS 上 1 メーター沈下した。橋は、元の高さに残っている。両方の護岸だけが沈下し、護岸の道から橋が上がっている。護岸の道を上に上げると内水が出ていかない、しかし護岸を上げなければいけないということで、コンクリの堤防を作っている。50 センチから 60 センチぐらい右岸の方にはずっと設置してある。それで、堤防を元の高さに維持して、川の水を抑えている。しかし、道路は下がったままで、住宅もそのまま。震災の遺構は見て歩かれるが、復興でそういう工事をしてこうなっているということは、なかなか見に来られたことはない。地震があって皆さん頑張って復旧は今現在こうなっているという一つのストーリーもありだと思う。その辺も考慮いただければ。

4．事務連絡

- 事務局
  - 次回の委員会の開催時期については、いただいた意見の進捗状況等を踏まえ検討、等。

5．閉会

以上